佳作

成しとげる為の

長野県　原村立原中学校三年　澁澤　一蕗

ただがむしゃらに走った。止まろうとも思った。涙が出そうだった。今までで一番、苦しかった、辛かった。

六月四日、晴れ。今日は第十九回富士ヒルクライムの開催日だ。二十二キロほどの登りを自転車でかけ登る、日本一のヒルクライムレースだ。私は足が弱く運動をするとすぐ痛めてしまう。しかし自転車は別だった。足への負担が少なくゆいいつできるスポーツだった。運動することへの喜びや辛さを初めて知ることができたのも自転車のおかげだった。そんな自転車が大好きになった私は部活や勉強で忙しいながらも、休日には自転車で遠出をしていた。

大好きな自転車での初レース。運動ができず、全く体力が無い私は不安と緊張で胸がいっぱいだった。今回は父と二人での挑戦だ。私以上に自転車が好きな父は毎日トレーニングをしていて富士ヒルクライムで良いタイムを出すことを目標としていた。だが今回は私と完走することを目標としてくれていて、夢ともしてくれていた。そんな父の期待を背負い、自転車にまたがった。無謀な挑戦だとも内心、思っていた。そして、スタートラインを超えた。

二十二キロの登りは富士山の五合目がゴールだった。走者は合計で約八千人ほどいた。周りの人は真剣な目をして走っていた。斜度が少し上がるとペダルは重くなり、少し下がると軽くなる。父の背中を必死に追いかけた。

一合目という看板を見た。まだ五分の一なのかと心に重りがのしかかる。

二合目という看板を見た。まだ半分もいっていないのかと辛くなる。

三合目、特別苦しい坂を登っていた。自転車をおりて押している人が何人かいる。うらやましくなった。しかし父はおりようとしない。期待に応えようと歯をくいしばった。

四合目はもう限界だった。やっぱり自分には無理なんだと、父に申し訳なくなった。しかし毎日、今日のために走っている父を思い出すと足が自然に動いた。道中、暑い中太鼓をたたいて応援をしている人がいた。もっと頑張ろうという気持ちと、何故頑張るんだろうという気持ちがぶつかった。道のわきには数百メートルごとにあと何キロと印されていた。着実に進んでいる。あと少し。私は下を向き、地面とホイールを見つめる。父は励ましの言葉をかけてくれる。とうとうゴールラインが見える。人生で一番死ぬと感じていた。今までの道のりと比べものにならないくらい長くて苦しく感じた。しかし進んでいる。ホイールの下はゴールラインだった。

その後の感動は忘れられなかった。やってやったぞ、と思った。父は、涙ぐんでいた。私も、泣いた。嬉し泣きは人生で初めてだった。何もできなかった自分が一つ、何かを成しとげたんだ。震えるほどの感動とはこれだ。